第三十一回
光照寺報恩講　法話

「聞思して遲慮することなかれ」

本明　義樹先生　講述
（大谷大学専任講師、
京都教区専光寺住職）

2021年　光照寺報恩講　本明義樹先生「聞思して遅慮することなかれ」

ようこそお参りくださいました。昨年に引き続き光照寺様の報恩講にご縁をいただきました本明と申します。今ご住職様からご紹介がございましたけれども、昨年までは真宗大谷派の聖教編纂室の研究員としてのお役目をいただいておりましたが、この四月から大谷大学文学部の真宗学科でお世話になっております。授業の準備等でバタバタと日々過ぎていく中で充分な準備ができないまま今日をお迎えしたことでございます。私は京都府の南の端、奈良県との境にございます専光寺の住職でもございます。随分と田舎でありまして、過疎が進み空き家が目立つようになってまいりました。五年、十年後には住民が激減すると予想されている地域であります。今後のお寺のあり方、報恩講をお勤めするなどの仏事についても、その意味が問われております。コロナによって時代社会が大きく変化する中で、今一度原点に立ち返る必要を感じております。

今年はオンラインでの開催ということになりました。皆さんにお会いできることを楽しみにしておりました。やはりお会いできないのはちょっと残念ですが、ご住職のお話にありましたように報恩講をお勤めすることが当たり前になっていたのですけれども、報恩講は一年一年、一度限りの本当に大切な法要であったということをあらためて感じさせられております。要するに、報恩講という仏事を通して、私たちは本当に親鸞聖人に向き合っているのかということが問われた

ということですね。親鸞聖人は今日の講題に挙げさせて頂きましたように「聞思して遅慮することなかれ」と私たちに一つの願いを託してくださっております。その「聞思して遅慮することなかれ」という呼びかけに本当に私たちは応答できているのでしょうか。本日は、教えを「聞思」するということがどういうことなのか、改めて皆さんと一緒に尋ねさせていただきたいと思っております。

報恩講とは、親鸞聖人の命日にお勤めをする年忌法要ではありますけれども、しかしそれが単なる儀式として執行されるだけのものであれば、どんな災害の時や、戦争中であっても、途切れることなくお勤めされるということはなかったのではないかと思います。報恩講をお勤めするご門徒の一人ひとりの感動、つまり真宗の教えとの出会いを通して深い感動があったからこそ、今日までの数百年間途切れることなく、報恩講という仏事が勤められてきたのでしょう。私が報恩講をお勤めし、私が教えを学ぼうと考える以前に、この数百年の念仏者の感動の受け渡しがあったのだという歴史的事実をあらためて私たちが受け止め直していくこともとても大切なことだと思っています。その上で、現代に生きる私たちに問われているのは、これまでの先人がそうであったように、親鸞聖人の生きた声、よびかけに耳を傾ける、つまり聞法する場として、この報恩講という仏事が開かれているのかどうかという、その一点にあると思っております。

今日はオンラインでの聞法の場を開いてくださったのですが、コロナによって聞法の場所がど

んどん減っています。そんな中、東本願寺においてもインターネット上で法話の配信がなされております。有志の方や個人のご住職もオンラインで教えを伝えようとして下さっている現状がございます。

翻って私たちの今の社会を考えますと、発信するということが非常に盛んになっています。例えば動画で法話を配信するにはユーチューブというウェブサイトがあります。又ツイッターで自分が今考えていることをつぶやくこともできる。さらに、フェイスブックでは友達に気軽に情報を発信することもでき、インスタグラムでは自分の写真や画像を公開することもできます。このように発信するための媒体が非常に充実してきているのです。ですから前のアメリカの大統領もそうですけれど、政治家なんかもそういうメディアを通じて自分の意見を発信することが多くなってきて、逆に発信の内容が虚偽、つまりフェイクであることも指摘されるほどです。メディア産業は巨大なビジネスになるほど盛んになっている現状があるのですが、それは裏を返せば、それだけ人は発信したいというか、承認されたいということが強いのだと思います。その発信だけがクローズアップされる中で危惧されるのは、私たちは果たして受信できているのかという問題です。はたして私たちは、日々配信されつづける多くの声や言葉に対して、しっかりと向き合い、聞くことができているのでしょうか。例えば法話を聞かせていただくことがあります。話を聞くというのは、言葉の内容だけを理解するのではなくて、その言葉の背景にある喜びの気持ちや怒

りや悲しみをも受け取ることが聞くということではないでしょうか。場合によっては長い沈黙があったりすると思うのですが、そういう沈黙をも受けとめることが、本当に聞くということではないかと思うのです。ところが最近の動画などは編集をして沈黙の部分をカットしたり、先生が何度も繰り返されているような部分は編集して見やすいようにするということがなされていると聞いております。言葉を伝えようとしても上手く伝えきれないような大切な言葉を絞り出すための沈黙や、伝えたいという熱意が何度も同じ言葉を繰り返させたりすることもあると思うのです。そういうものを受け止めてはじめて、聞くということだと思うのです。ところが、動画などを見ているとき、ともすれば表面的な話の内容や意味が理解できればいいというふうに、つまり私たちは動画の話を「聞く」というよりは、動画を「見る」という事になっていないでしょうか。聞き流していたり、自分の主張に合うもの、自分の考えに合うものだけをピックアップして聞いていないか。私自身が聞くということについて、一度立ち止まって考えないといけないということを特に最近思っています。

日常の生活でもそうです。これまでは電話という媒体を用いて人と話すというのが当たり前のことだったのですが、最近は皆さんどうですかね。同じ携帯電話を使っていてもラインとかメールということですませることが増えていませんか。人の話を耳で聞くというよりは文字で見ることになっているように思います。ただ、文面だけでは、それが喜んでいるのか、怒っているのか

相手に誤解をされると困るから、文章の最後に笑顔や、泣き顔、怒っている顔などの顔文字を添えることもありますね。そんなことは声を聞けば分かるのに、声を聞かずに、文字で済まそうとしてしまいます。それくらい人と人とのやり取り、コミュニケーションすらも目で見るものになってきているということです。そういう時代社会の中で私たち自身の聞く場が失われ続け、受け止めるという力、受信力というものが弱ってきているのではないかと思うのです。論語で有名な

朝(あした)に道を聞かば、夕に死するとも可なり

という言葉がございます。やはり私たちは本当は聞きたいはずなのです。生きた声、いのちに響く声、真実なる言葉を聞きたいと願っているのではないでしょうか。ところが今、私達は理解をすること、表面的にわかるということに非常に重点を置いてしまって、聞くという姿勢というか、共感するということが非常に弱くなってきています。そんな私たちに聞くということの大切さを、自身の仏道を歩む姿を通して教えて下さったのが親鸞聖人です。その生涯はまさに聞思、聞くということに徹底されていた方といっていいと思います。画面を共有させていただきます。これが親鸞聖人の『教行信証』の「総序」の言葉です。

誠なるかなや、摂取不捨の真言、超世希有の正法、聞思して遅慮することなかれ。ここに愚禿釈の親鸞、慶ばしいかな、西蕃・月支の聖典、東夏・日域の師釈、遇いがたくして今

遇うことを得たり。聞きがたくしてすでに聞くことを得たり。真宗の教行証を敬信して、特に如来の恩徳の深きことを知りぬ。ここをもって、聞くところを慶び、獲るところを嘆ずるなりと。

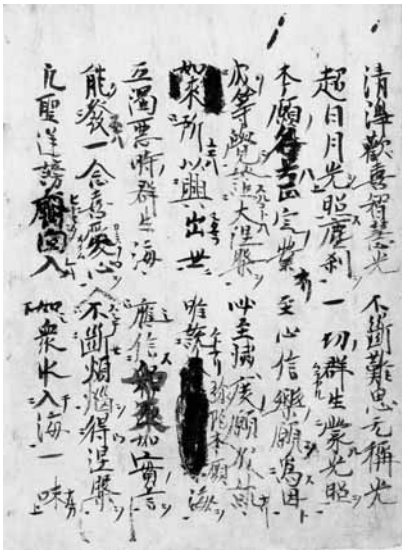
（『教行信証』「総序」『真宗聖典』一五〇頁）

ここに「聞思して遅慮することなかれ」という今日の講題がございます。続きまして、

ここに愚禿釈の親鸞、慶ばしいかな、西蕃・月支の聖典、東夏・日域の師釈、遇いがたくして今遇うことを得たり。聞きがたくしてすでに聞くことを得たり。真宗の教行証を敬信して、特に如来の恩徳の深きことを知りぬ。ここをもって、聞くところを慶び、獲るところを嘆ずるなりと。

こういうようにですね、徹底して聞くということが述べられています。「聞きがたくしてすでに聞く」とその感動が語られています。ここで「西蕃・月支の聖典」はインドやインドを含む西域の地域、それから「東夏・日域」とは中国や日本の念仏の伝統に連なる七高僧をはじめとする師釈。そういった方々の教えに遇い難くして遇い、聞き難くして聞くことを得たとおっしゃる。

しかし、考えてみますと親鸞聖人が『教行信証』を撰述される時には、こうした祖師方は全員故人ですね。しかも何百年も前に亡くなっておられる方がたくさんいらっしゃる。ですから親鸞聖人は文字を通して、つまり書物を読んでおられるわけです。しかしここで親鸞聖人は遇いがたくして遇う、聞き難くして聞くと、あくまでも祖師方にお遇いし、そして祖師方のお言葉を生きた声として聞いたと述懐されるのです。これは決して言葉のレトリック、つまり修辞法としての言葉ではなくて、親鸞聖人ご自身が、祖師方の生きた声と出遇い、そして聞くことができたという深い感動をもって語られたものだと思います。私たちはともすれば本を読んで、分かりたい、理解したいということが先行してしまうということがあるのですね。これは皆さんが今日もお勤めをいただきました親鸞聖人の御真筆の『正信偈』の一部分です。



このように大体六十歳くらいから八十歳の後半まで約三十年もの間、推敲され、手を入れ続けられています。六行目の下の段の一句は、最初「応信釈迦如実言」と書かれていたのですが「応信如来如実言」と上から「如来」と墨書きと朱書きで書き改められています。その一行前の「唯誓弥陀本願海」も、最初は「唯誓本願一乗海」と書いてあったことがわかります。このように、聞き得た教えをご自身の中で何度も何度も反芻して、つまり聞思する中で、妥協することなく手を加えて真実なる言葉を求め続けられた、その親鸞聖人のお姿が見て取れるのではないかと思うのです。

さらに親鸞聖人の聞思の姿を知るうえで、法然上人から『選択集』を付属された時のことが語られる『教行信証』の「後序」の文を見てみたいと思います。

しかるに愚禿釈の鸞、建仁辛の酉の暦、雑行を棄てて本願に帰す。元久乙の丑の歳、恩恕を蒙りて『選択』を書しき。同じき年の初夏中旬第四日に、「選択本願念仏集」の内題の字、ならびに「南無阿弥陀仏　往生之業　念仏為本」と、「釈の綽空」の字と、空（源空）の真筆をもって、これを書かしめたまいき。同じき日、空の真影申し預かりて、図画し奉る。

（『教行信証』「化身土巻」『真宗聖典』三九九頁）

ここで「恩恕を蒙りて『選択』を書しき」と、数少ない門弟の一人として自分も『選択集』の書写を許されたことが感動をもって記されています。そして、同じ年の初夏に「選択本願念仏集」の内題の字と「南無阿弥陀仏　往生之業　念仏為本」と、「釈の綽空」の字を法然上人の真筆でもって書いていただきましたとあります。そうして同じ日に「空の真影」というのは、法然上人の御真影、つまり肖像画ですね、それをお借りして写させてもらったというそういう一文があるのです。つまり『選択集』を書写させていただいただけでなく、法然上人の肖像画をも書かせてもらったのだと。このことから、親鸞聖人は法然上人と離ればなれになった後も、おそらくその御真影を前にして、書写した『選択集』に向き合い、味読されていたではないかと想像できます。すると、親鸞聖人はその書写した『選択集』という書物を単に読んでいるのではなく、まさに法然上人が目の前にいるが如く、その教えを聞くという姿勢で向き合っておられたのではないかと思うのです。こうした伝承のあり方は、親鸞聖人の門弟である専信房専海に『教行信証』の書写を許される時にも通じています。この時にも図絵を許されており、それが今も伝わる安城の御影だといわれています。法然から親鸞へ、そしてさらには弟子へと、聞思の伝統がそこにはあるのでしょう。そう考えますと、私達は書物を読み、理解しようとしますけれども、当時の人達というのは、書物に接するときでも、生きた人と出会い、生きた声を聞くということがまず一番にあったと思うのです。仏教一般でいう読誦ということですね。これは普通声に出して読むことをい

うのです。文字を見ながら読むという場合は読、文字を見ない場合は誦というふうに区別する場合がありますが、声に出して読むのが前提です。

【読誦】

「仏教では経典を声にだして読むことをいう。文字をみる場合を「読」とし、文字を見ない場合を「誦」として区別することがある。」　（「岩波仏教辞典」）

いずれにしてもお聖教というのは基本的に声に出して読まれるものであり、それは、生きた声と触れることにつながる、それが実は読誦ということだと思います。

どうも私達はいつの頃からか、手っ取り早く、すぐに理解したいと考える傾向が非常に強くなりました。読むという感覚が強くなる一方で、逆に聞くという姿勢が失われてしまっているのではないでしょうか。特に最近では私たちの手っ取り早くわかりたいという欲求に応えようと、ＮＨＫには「一〇〇分で名著」という人気番組があるほどです。何百頁もある本を一〇〇分で理解することなんてできるのかしらと思うのですけれども。書籍でも「三分間でビジュアル図解仏教」などのように、とにかく早く知ることができ、簡単に理解出来ることを売りにしたものが流通しているように思います。手っ取り早くということはもちろん問題なのですが、この「解る」とい

うことが、実は大きな問題であることを、少し皆さんと確認をしたいと思っています。解る、理解するという言葉に使われる「解」という漢字ですが、

【解】

「刀」で「牛」「角」をわけるようすから構成される。

（三省堂『全訳漢辞海』）

この字は右上に「刀」がありますね。左側に「角」がありますね。右下には「牛」がありますが、これは牛の体を表しています。つまり「解」という字の成り立ちは、「刀」で「角」と「牛」の体を分ける、切り分ける、ということが成り立ちとしてある字なのです。つまり解るというのは、一つの物事を二つに分けて、さらにそれを細分化していくことに、その原意があるということです。牛であれば、ここに角があり、心臓があり、肉がある、というようにバラバラにして、把握することが「解る」ということの意味です。しかし、そこで解ったことは、内蔵や肉などの死んだ牛の一部でしかないのです。それは、生き生きと目を輝かせて、草原を歩く牛ではないのです。私たちがお聖教を読むとなると、この言葉はどういう意味だろうか、文法的にはどういう意味だろうかということがまず気になります。もちろん大事なことですけれど、そうして分解していって把握しようとした言葉は、いってみれば生きた声ではなくなってしまうのですね。例え

ば、ある人の身長や体重、血圧やコレステロールの値、学力テストの結果、五十メートル走の速さ、そういったもののデータを大量に集めたとします。しかし、その人の細かなデータをどれだけ把握できても、その人に出会ったことにはならないですよね。私たちが理解したことで、知識はどこまでも増えていきますが、語っている人の生きた声、生きた言葉には出会えないということがあるわけです。

私たちの認識には様々なレベルがありまして、理解するという認識もありますが、感じるという認識もあります。例えば私たちはともすれば何でもかんでも理解すればいいと思ってしまうのですが、仏法と世法では根本的に異なると思うのです。これは極めて単純化したものですが、私が日ごろ考えていることをまとめて見たのですが、

【世法と仏法】

「仏法」を学ぶ＝感じる・・・共感＝信知

「世法」を学ぶ＝知　る・・・理解＝知的把握

世法というのは、医学も法律も科学技術も、私達の世間を生きていくための様々な法を表しま

す。それらは知識を得る、理解するものであって、法そのものを把握することに力点が置かれます。それはそれでとても大事なことなのでしょう。一方で、仏法というのは、世法のように理解するものではなく、感じる世界、共感するということに力点が置かれるべきものです。生きた声を聞くことでその人の願いや思想に共感し、感じることが非常に大事だと思うのです。私がここで言いたいのは、どっちが大事だということではなくて、仏法を聞くのであれば、それは理解しようとするのではなく、やはり感じる世界、共感できる世界というものを大切にしなくてはならないと思うのです。ここで少し休憩を挟ませていただきたいと思います。

〈休憩〉

引き続き少々お時間をいただけたらと思います。

先程からお話しておりますことは、私たちが教えを聞くということは、共感するといいますか、言葉や文字の表面的な理解だけでは無くて、その奥にある願いというか、そういうものまでを受けとめることが大事だということを確認させて頂いております。親鸞聖人が特に力をいれて述べられているのは、仏法は聞くもの、聞思するものだということですが、私たちはどうしても理解し、知識として把握しようとしてしまう。すると教えを対象化してしまうわけです。つまり対象

化して教えを捉えようとしてしまいますから、自分の問題にならないのです。そのように対象化してしまうと、私たちは何かの為というように、目的意識を持って、教えに向き合ってしまうのですね。つまり何かのために聞くということになってしまうのですね。それを親鸞聖人が特に注意されて『教行信証』の「信巻」にも「化身土巻」にも引用されるのが『涅槃経』というお経の一節です。「聞不具足」ということについて説かれてあります。

（教えの『目的化』）

『涅槃経』（迦葉菩薩品）に言わく、いかんが名づけて「聞不具足」とする。如来の所説は十二部経なり。ただ六部を信じて、未だ六部を信ぜず。このゆえに名づけて「聞不具足」とす。またこの六部の経を受持すといえども、読誦に能わずして他のために解説するは、利益するところなけん。このゆえに名づけて「聞不具足」とす。またこの六部の経を受け已りて、論議のためのゆえに、勝他のためのゆえに、利養のためのゆえに、諸有のためのゆえに、持読誦説せん。このゆえに名づけて「聞不具足」とす、とのたまえり。已上

（『教行信証』「信巻」『真宗聖典』二四〇頁）

「聞不具足」つまり、教えを本当に聞いたことになっていないあり方が説かれている部分です。

何が「聞不具足」かというと、まず十二部あるお経のうちの六部の経を信じ、あとの六部を信じていないなら、それはきちんと聞いていることにはならないと。これは意味としてはよく分かります。ところが、さらにつづけて、六部の経を受持することができたとしても、それが「論議のため」、これは知識や教養のためですね。それから「勝他のため」、これは相手に勝ちかつため、つまり相手より自分が勝れたものになるためです。「利養のため」、これは文字通り自分のお金とか自分の養っていくためです。そうした諸々のために「持読誦説」しようとしても、それは「聞不具足」ですよと。それは本当に聞いたことにはならないのですよ、ということを親鸞聖人はご自身の戒めも含めてこの『涅槃経』のお経を非常に大事にされています。これは、私自身も大学に入りまして論文を書くため、授業で発表をするために、またお寺ではご門徒の皆さんに少しでもわかりやすいお話ができるように、まさに「～ため」に真宗を学び、教えを聞いていたということがあるわけです。しかし、「諸有のため」とありますように、何かのために教えを聞くということ、つまり目的意識をもって聞くことそのことが、実は「聞不具足」なのだと教えられているのです。目的意識をもって聞くことが、なぜ問題かといいますと、聞いている自分のことが全く問題にならないということですね。何かのために聞くことで、本当はこの私というものに教えが語りかけられているにも関わらず、その私自身が不問のままなのです。だから「聞不具足」と戒められているのです。

この目的化して教えを聞くと、次に出てくる問題は何かといいますと、聞いた教えを把握しようとしてしまうことです。つまり教えの所有化が起こります。何かのために聞いた以上、それを自分の知識として身につけよう、所有しようとする。それに対して「化身土巻」に宗祖の御自釈ですが、

おおよそ大小聖人・一切善人、本願の嘉号をもって己が善根とするがゆえに、信を生ずることあたわず、仏智を了らず。かの因を建立せることを了知することあたわざるがゆえに、報土に入ることなきなり。

（『教行信証』「化身土巻」『真宗聖典』　三五六頁）

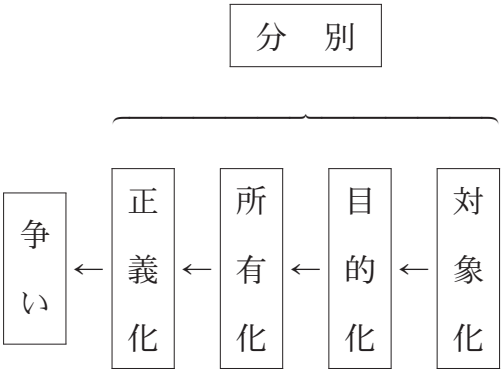
と、述べられています。教えを聞いて、学んでいる人ですから、「大小聖人・一切善人」と言われています。その人たちが「本願の嘉号をもって己が善根とする」、つまり、教えを聞いてその結果、お念仏ですら自分の善根として所有しようとしてしまう。そこに、真実の信心が生じることも、仏智をさとることもないのだと教えて下さっているのです。私たちにとって、この所有化、所有欲というものは、無意識のものだと言っていいと思います。例えば私の自己紹介をするというと私は大谷大学の文学部の講師ですと。専光寺の住職です。履歴書であれば最終学歴は何々で

すと。免許は普通免許を持っていますとか。こういうことを私の自身紹介として語るわけです。ところが、自己紹介として話している内容は、全て私の持ち物に過ぎません。私自身を言い表しているつもりで、実は手に入れた資格やキャリアを自分のこととして話している。つまり私達は所有しているもの、手に入れたものを私自身であると無意識のうちに考えているわけです。

これは前にも紹介したかもしれませんが、エーリッヒ・フロムという方が『生きるということ』という本の中で人間には「もつ」というあり方と「ある」というあり方があると仰っていることがとても参考になります。「もつ」というあり方は自分の持ち物をまるで自分であるかのように考え、そして他人をその人の持ち物、例えば地位や名誉、財力などで判断するようなあり方だと。そして、そうしたあり方を超えていかなくてはならないということが述べられているのですが、私たちはともすれば教えを対象化して聞くことで、私はこれだけ知っている、これだけのものを学んできたと無意識のなかで所有してしまっているのではないかと思うのです。

更に、この目的化され、所有された教えは、自分の得たものとして握りしめることで、自分の得たものこそが正しいのだ、という正義化という問題を引き起こしてしまうのです。つまり私が所有したものが、私の価値観、私の物差しとして形成され、それが義としてたてられてしまう。この義ということについて、親鸞聖人は繰り返し、法然上人の仰せとして「義なきをもって義とす」とおっしゃいます。この「義」を立ててしまうことが、聞法している私たちにとってとても

大きな問題だと認識されていた訳です。つまり義をたてるということは、私が正義だと認識しているわけです。自分の価値観が正しいと思うのは当然ですから、疑う余地がないのです。そうすると皆がそれぞれの価値観、自分の物差し、つまり正義を持っているわけです。その結果、正義と正義がぶつかってしまうのです。要するに、争いが起こってしまいます。これまでの一連の話を単純化した図です。



まず、私たちは、理解しようとすると、対象化してしまうわけです。それは目的化につながります。そして、その理解した教えを所有しようとしてしまう。そうするとそこに義が立てられますから正義化が起こる。そうすると正義と正義がぶつかることになり、争いが起こってしまう。私はこの「対象化」から「正義化」に到る一連のことを仏教では「分別」と言っているのだと考えています。そして、この分別によって、人と人とが傷つけあい、争ってしまうあり方をどうしたら超えていけるのかを、どこまでも深く考えられた方がお釈迦様であり、それに連なる大乗仏教の根源的な願いではないかと思うのです。そのことは実は私

たちが教えを聞いている浄土教も同じです。皆さんが今日もご本尊として手を合わせていただいております阿弥陀如来、阿弥陀様ですが、この阿弥陀様が菩薩であった時、法蔵菩薩と名のられたことは皆様ご存じだと思います。その法蔵菩薩は元々国王、つまり王様だったのですね。その王位を棄てて、出家されて法蔵菩薩となられた。その王であったときの名前が、実は「無諍念王」という名の王様だったのです。法蔵菩薩となられるの前の名前が、

「無諍念王」

↓「諍い無きことを念ずる王」

これを見ていただきますとわかるように、あらそいの無いことを念ずる王という名前だったのです。つまり法蔵菩薩が、王としておられた頃、やはり世俗を生きていく中で争いが起こり、人を傷つけ、傷つけられるという中で多くの悲しみや苦しみを目の当たりにされたはずです。一体どうすれば、この争いを乗り越えることができるのかを、悩まれたと思うのです。そしてついに、時代を超え、民族を超える真の争いの無い世界は人々の宗教心によってしか与えられないと悟り、出家し、法蔵比丘と名のられたのでした。さかのぼれば、阿弥陀如来は、無諍の世界を念じた国王にそのはじめがあったのです。つまり法蔵菩薩の根源的な願いというものが、その王の名前に

見ていけるわけです。そして、その時に出会われた師が世自在王仏という方に出会われるのです。

「世自在王仏」

世自在王仏とは、世において自在なる王、それは自在なる世を願う王という名告りとでもいえるのでしょう。つまり一人一人が傷つけあうことなく文字通り自在なる命、その存在を争うことなくだれもがお互いを尊重しあうことできる世を願いとされた仏様に出会われるのです。そして出家をして法蔵菩薩となられたということがあるわけです。その争いを超えるために、「分別」を超えることが願われているのです。ところが、私たちは、そうした願いがかけられている尊い教えを、分別をもって、把握し、理解し、義を立てようとしているのではないでしょうか。本来、私たちの義として立てられた自分の価値観や物差しというものが照らされ、破られるために聞法があるはずなのです。そのことが「聞思して遅慮することなかれ」という親鸞聖人の願いに託されていると思うのです。

昨年のことになるのですが、日本のテニス選手で大阪なおみという選手がおられまして、皆さんニュースなどで見られたことがあると思います。昨年の全米オープンで優勝されてたのですね。丁度その頃アメリカでは、ジョージ・フロイド事件などに代表される、黒人の方が警察官の過剰

な取り締まりによる暴力で命を落とされる事件相次いでいました。大阪選手は、その殺された方々の追悼、人種差別の撤廃の願いを込めて、テニスコートに入場をされる時、亡くなられた方の名前が書かれた黒いマスクをされたのです。全試合、勝ち進むと優勝まで七試合あるのですね。その時に大阪選手は七試合勝ち上がって優勝されたので用意していた七人の名前を全部着けて入場することができた。その優勝された時のインタビューが私は非常に印象に残っております。インタビュアーの方がこういうことをおっしゃったのです。「（人種差別の抗議の為に）あなたは七試合で被害者の七名の名前を書いたマスクを着けられましたね。あなたが発信をしたかったメッセージは何ですか」と尋ねられたのです。それに対して大阪選手は「あなたが受け取ったメッセージは何ですか。私のメッセージをあなたがどのように受け取ったかに興味があります」と。こういうふうに切り返されたのですね。大阪選手が亡くなられた黒人の名前が書かれたマスクを付けられたのは、スポーツに政治的な問題を持ち込むべきでないという批判も承知のうえで、それでも、目の前にある人種差別に対する悲しみや憤りから何かしなければと感じておられたからだと思います。言葉では言い表しようのない、深い悲しみや憤りをそのマスクを着けるという沈黙のパフォーマンスで表現されたわけです。にもかかわらず、その表現された姿を、私たちはどういう意味ですか、もっとわかりやすく説明して下さいと、理解したがるのです。投げかけられているのは私たちなのです。にもかかわらずまだそのことを要約してもらいたい、もっと簡潔に、

もっとわかりやすくして欲しい。それが、このインタビュアーの言葉に象徴的に表れていました。そのことを察してか、大阪選手は、あなたはどう受けとめたのですか？どう感じられたのですか？と聞き返されたのです。このやりとりには、ハッとさせられました。自分も、大阪選手がどういう意味を込めて、どのようなメッセージを発信したかったのか聞いてみたいと思っていたからです。感じる、受けとめるよりも、知りたい、理解したいという気持ちがどうしても先行するのです。でもこれは明らかに問題です。受けとめるべきはこちらのはずです。亡くなった人の無念な思い、遺族の悲しみ、終わることの無い差別の連鎖、自身もその差別を生み出す一人であるということなど、一人一人が向き合い、感じ、共感すべき事柄です。理解して、解ったことにして終わらせることのできない問題であるはずです。

　そのとき、ふと自分が親鸞聖人にどのように向き合っていただろうかと考えさせられました。もし、自分が親鸞聖人にお会いできるとしたら、どのようなことをお話させて頂くだろうかと。私には、尋ねたいことがたくさんあるのですね。この箇所はなぜ書き改められたのですかとか、この文章の意味を教えてくださいなど、次から次から出てくると思うのです。その中で一番親鸞聖人に聞いてみたいことの一つが、ご自身の名のりでもある「非僧非俗」（僧に非ず俗に非ず）という言葉についてです。つまり、僧でもなくて俗でもなかったら一体何なのですか？この言葉にはどういう意味があるのですか？説明して頂けませんかと聞くと思うのです。すると、親鸞聖

人はですね、悲しそうな顔をして、しばらくの沈黙のあと、「あなたはその言葉から何を感じましたか？」といわれるのではないかと思ったのです。僧と俗の対立の狭間で弾圧にあい、社会には厳然とした格差や差別があって、支配するものとされるものとの分断がある、そのような中で、親鸞聖人は深い悲しみと憤りの中で言葉にすることができないような自分の思いを「非僧非俗」という言葉に託されたはずなのです。

その言葉に託された悲しみや願いに触れようともせず、私はそれを理解したい、知りたいと思っている。親鸞聖人からメッセージを投げかけられているのは私なのです。その私といえば、僧でもあるし、俗でもあるような、中途半端な生き方をし、お寺では法衣を着てお参りに行き、大学ではネクタイを締めて教えている。僧と俗のあり方や、自分自身のあり方に、傷みも悲しみも感じることなく、何とも思わずに生活をしている私に、あなたは「非僧非俗」という名のり、宣言から何かを感じませんかと、宗祖はおっしゃられるのではないかと思ったのです。私たちが受けとめ、感じ、共感すべきことを、理解をしようとしてしまう。そこに私たちの大きな問題があるのではないでしょうか。

親鸞聖人は『一念多念文意』という書物の中で次のような言葉を述べてくださっています。これは「不虚作住持功徳」という天親菩薩の『浄土論』の言葉の文意ですが、その中で金剛心の人、つまり信心の人というのは、「しらず、もとめざるに、功徳の大宝、そのみにみちみつがゆえに、

大宝海とたとえたるなり。」とあります。

（「感」の世界）

しかれば、金剛心のひとは、しらず、もとめざるに、功徳の大宝、そのみにみちみつがゆえに、大宝海とたとえたるなり。

（『一念多念文意』『真宗聖典』五四四頁）

つまり、信心とは、「しらず、もとめざる」世界、つまり聞思するところに開かれる世界なのだと。ところが私たちは知りたい、答えが欲しいところにおります。しかし、知ることで、また答えを握りしめることで、私たちは結局苦悩を深めることにしかならないのだと。「しらず、もとめざる」ところに開かれる世界、つまり感じる世界にこそ、「功徳の大宝」がこの身にみちみちてくるのであると。教えを聞思するところに、私の価値観が問われ、本当の功徳が私たちの身に満ちてくださるのだということを親鸞聖人が力を尽くしてお説きくださっているのです。

こうして報恩講をお勤めする私たち一人一人に、親鸞聖人をはじめ、無数の念仏者の方々から、どうか教えに出会ってくれと、そして自らが握りしめているこれこそが正義だという価値観、物差しというものを手放すところに開かれる本当の安心世界というものにどうか出会ってくれと願

われ、呼びかけられているのです。ところが私たちはあれを知りたい、これも知りたいと、分別し、理解したい気持ちが先行し、そうした呼びかけに向き合うということがない。そんな私たちへ目を覚ませと強く促して下さるお言葉が、「聞思して遅慮することなかれ」という親鸞聖人の呼びかけなのではないでしょうか。本日の報恩講ではそうした私たちにかけられた願いの一端を皆様方とともに確かめさせていただきました。短い時間でまとまりのないお話になってしまいましたが、報恩講という仏事で常に私たちが立ち返り、思い起こさなくてはならない大切な言葉だと感じております。お時間になりましたのでこの辺でお許しをいただきたいと思います。ありがとうございました。

〈感想〉

司会）それではお時間も限られた中で今日の話を聞いて、あるいは日頃疑問を持ちになられたり、生活する上でいろんな不安を抱えながら歩んでいるということの中で先生にお尋ねしてみようということがありましたら、挙手をして尋ねていただければと思います。

安徳）先生、今日はどうもありがとうございました。私がちょっと理解していない部分で聞思ということはよく分かるのですが、遅慮することなかれとは具体的にはどういうことを考えていけばいいのでしょうか。

先生）ありがとうございます。「遅」というのは気後れするということです。当時、聞法することに対して躊躇するということがあったのだと思います。つまり念仏するということは弾圧と直結しているわけです。例えばその地域で自分が念仏して親鸞の教えを聞いていますということだけで、批判とか差別の対象となることがある。そんな状況の中であっても、臆することなく教えに出会わなくてはならない、命がけで教えに出会ってほしいという強いメッセージが読み取れるのではないかと思います。「慮」とは慮（おもんぱか）るですから、思いはか

らうことです。教えを聞いたらどうなるのか、聞くことによってどんなメリットがあるか、損か得かという風に理知分別を働かせることをいいます。私達は教えを聞こうとすぐにはならない。それは慮りをするからためらいが生まれるということもあるのでしょう。しかし、ここで「遅」というのは、少なくとも、宗祖在世の当時は、現在のように教えを聞いてみようと気軽に動ける状況ではなく、やはり気後れするということがあったことと、「慮」とあるのは、今日お話しをしたような対象化とか所有化、正義化というような分別によって教えを聞くことがあってはならないということから、「遅慮することなかれ」と仰っていると見ていいのではないかと私は考えています。

安徳）どうもありがとうございました。先程先生が言われた私ごととして聞きなさいと理解してもよろしいでしょうか。

先生）そうです。結局対象化というのは教えを向こう側において、常に目線が外に向いてこれがああだ、あれがこうだと言うのではなくて、「私ごと」とは、つまり教えが私の方に矢印、つまりベクトルが向いて、私自身が照らされるという意味で「私ごと」として聞く事が非常に大事だということです。

安徳）ありがとうございました。よくわかりました。

司会）ネットからです。お名前は、どなたでしょうか。

松田）先生のお話で、親鸞聖人が六十歳から八十五歳までの間、書物を色々見直されたということを言われたのですけれど、それは感の世界かなとちょっと思ったのですが。というのは親鸞聖人は偉いお方のお話を色々調べて色々感じられて色々教えを教わってきておられますよね。それを一回聞いて解ったのではなくて、何回も何回も聞いて書き直されたと。それが先生が言われる感動の世界をずーっと維持されたというこの実質体験というものを日記のように書かなくて紙の上に上書きしたことで私らが見られると。そういう理解でよろしいのでしょうか。

先生）いいと思います。今おっしゃられる聞思の思の方ですね。思う方ですね。そこにも感動ということがとても大切だと思うのですね。聞いたことを反芻し、それを単なる知的理解に終えるのではなく、感動を上書きしていくといいますか、その繰り返しの中で、「坂東本」に手を入れ続けられたのだといってよいと思います。おっしゃるとおりだと思います。

松田）私の身の上からしたらもう七十歳なのです。八十歳まで生きられるかどうかわかりませんけれどこれからどう生きていこうかと思った時、親鸞聖人の生き方みたいな生き方もあるかなあと。というのは色々な感動の仕方もありますよ。迷いもあれば楽しいこともあるし、そういうものもあるけれども親鸞聖人の感動の仕方はちょっと違う。精神的な充実感というものを何回も何回も味わい噛み締めて喜んでおられるのかなあと。私も今先生が言われたように現代は楽しいことといっぱいあります。美味いものも山程あります。どうも七十歳くらいになって来たら、何かちょっと心に引っかかるものがあって、そういう生き方はどうしたらいいかなあと思った時、親鸞聖人みたいに書物をよく見て問いなおすと。実は私、毎朝、阿弥陀経を読んでいるのです。声を出して読んでます。これはまあ　私一生の間に二回も読んだ本も少ないけれど阿弥陀経はもっと読んでいるのです。そうすると毎日毎日違うのです。頭に浮かぶところが。私はものを書けないけれども、読んでいるだけで同じことを感動ということもないけどまあそうかもしれんなあぐらいですけれどもそういう世界を聖人は生きておられているのかなあと思うのですけれど。どうなのでしょうかねえ。

先生）そう思います。おっしゃるとおりです。教えを聞いてもやっぱり五年前と今では違う。昨日と今日でも違うわけです。そういうところにある感動というのを、それで完結せずに、

また聞き直すことで新たな感動を受け止めなおす、まさに聞思ですね。聞と思ですね。親鸞聖人の最晩年までの生涯にわたる歩みはこの聞と思の繰り返しの、まさに聞思の仏道を歩まれていたのだと思います。これは終わりのない歩みです。ですから親鸞聖人の「坂東本」を見てもらいましたが、書き改めなどが無数にある。すると、それを中途半端なもので、未完成だという人もいるのです。けっして未完成ではないのですが、しかし、この未完成ともいえる最後の最後まで問い続け、歩み続ける姿勢こそが本当の聞思の姿なのです。つまり終わりなどないのです。教えを聞き続け、感動し続け、反芻し続けて、自己を問い直し続け、その中で生命を終えていかれたのが親鸞聖人の生涯だったのだと思います。これで解りました、結論がでました、これが答えですというような人生は、そこで歩みが止まるわけで、そのような人生こそが虚しいのではないかと私は思うのです。感動と問い直しの中でいのちをいただいていく道こそが、真宗の門徒として、真の念仏者としての道ではないかという気がします。

松田）わかりました。よくわかりました。

淡海）先生ありがとうございました。これで三回目ですか伺わせていただきました。今回のお話

で身につまされていることがございます。私自身、聞法会には積極的にずっと出ていたのですがコロナ下においてそういった機会も少なかったのですから、実はどういう形で法を聞くことの喜びを得ようかと思ってしていたことは本を読むことだったのですね。先生からおっしゃられると理論を詰めているのではないかと、どちらかというとそういうタイプなのですけれど、ただ私はいつも色々な先生方の書かれたものを読ませていただいてその言葉の中で自分を確かめさせていただく。又、自分がわからない事に対して先生が表現される言葉がすごく心に打つ言葉があるとか、そういう形での私自身は書物を読ませていただくことはある意味で発見もあるし、わからないことをわからせていただくということもあります。同時にその感動ということがすごく大きかったのですね。いうなれば親鸞聖人も七高僧と実際にお目にかかっているわけではなくて全てそうした方々のお書きになったものを通してご自分の思慮を深めていかれたということでいらっしゃるわけですから、私どももやはり実際に人に遇うというところにいただく感動、自分自身をわからせていただくというそういった発見はもちろん大きいのですけれどそれができない昨今、やはり書物を通して読ませていただくというやり方も一つ認めていただくやり方と思うのです。そのへんはいかがでしょうか。本を読むことは悪いのではないし理論をつめることが決してマイナスではないというところも見ていただければと思ったのですけれど。

先生）すみません。私の話し方が悪くて上手く伝わっていないのだと思うのですが、親鸞聖人も書物を読まれたということなのですけれど、その読み方が今おっしゃってくださったように感動を持って、自分への呼びかけを聞く姿勢で読まれたのだということをお伝えしたかったのです。だから私が問題にしているのは、親鸞聖人の聞思、教えを聞くというのはその物理的に耳から聞くということが大事だといいたいのではなくて、宗祖ご自身が書物を読んだと言わずに聞いたと言われる、その聞くという姿勢、身に引き当てて聞き、感動する姿勢が大事だということなのです。書物を読むことがだめだということを言いたいのではないですし、知識を把握するという読み方も時には大事なのですが、今回お話したかったのは、本を読むとき、まさに私に呼びかけられた声を聞くごとくに読み、感動することが、親鸞の聞思という姿勢に通底するということです。ですから私たちも親鸞聖人の文を読んでいるわけですからそれを通して生きた親鸞聖人の声に出遇うというか、自身に呼びかけられたものとして聞くという姿勢、聞思の姿勢を忘れたらだめだということです。今おっしゃられるように本を読むのは大切なことだと思いますし、感動することはとても大事なことなので、私が否定してしまったように聞こえていたのなら、それはそうではないということをちょっと言っておきたいと思います。すみません。話し方がちょっと悪かったかもしれません。

淡海）とんでもございません。ちょっときつい言い方をしてしまって申し訳ございません。いまお伺いしておりまして先生がおっしゃられたいことは結局私どもが正義を掴んでしまうという、その言葉があったことは本当にそうだなとあと思って同感だと思いました。自分が常に生活している上でも自分のやっていることが全て正しいとどうしても掴みがちになるという、そういうことを仏法に照らし合わせてどうするかということを学ばさせていただくことがこの法を学ぶという日々だというふうにとらえさせていただいて、唯除される自分であり仏法までも握りしめてしまうという自分ということをもう一度確認しなくてはいけない問題だと思って聞かせていただきました。ありがとうございました。

住職）ありがとうございました。皆様よろしいでしょうか。三時を過ぎてまいりました。私は最近お寺でヨガをしております。ヨガの先生が握ったら離すということをお話ししていました。ヨガだけでなく仏教でも握ったら離すということがありますよと言ったら、ああそうですかと言われたのですが、握ったら離すという境地は人間何でも握りしめたいし、自分の所有化をしてしまう。そういうものから本当に開放されなければ真の安らぎはないですよということがやっぱり教えられるということありますよね。この間ヨガから教えられて仏教も共通するなあと思いながら自分も特にそうですが何でも握りしめてしまうようなも

のがあるのですけれど質問ではありませんが、何か先生一言いただけますでしょうか。

先生）おっしゃるとおりで、握ったら離すということは仏教にも通底する大切なことだと思います。ただ自分で離そうとして離すのではなく、教えに遇うことを通して、しらずもとめざるに、その手から離れているという、そういうところが大事だと思うのですね。何か私達は握ったら離せといわれると、離そう、離さなくてはならないと、自分で何とかしないといけないとどこかで思ってしまうのですけれど、その離すという行為はあくまで自然というか、しらずもとめざるに教えを聞くところにこんなものを握っていたのだと気付かされるというか、そこが聞法ということの非常に大事なことではないでしょうか。今ご住職の話を聞き、改めてそのように感じさせていただきました。

住職）どうもありがとうございました。先生には長時間オンラインでご法話をいただきましてありがとうございました。物足りないというかもっともっと聞きたいというそんな思いであります。先生は生活環境が変わられてお忙しいなかで、ご無理を申しましてお話をいただきありがとうございました。また、冊子化して味わっていきたいと思います。今日はこれで報恩講を終了させていただきます。何か一年が終わるような気持ちで今おります。今

日は貴重なオンラインの報恩講をお勤めすることができ、先生にご法話をいただきまして誠にありがとうございました。

あとがき

本書は二〇二一年十月二十三日、第三十一回報恩講における本明義樹先生（大谷大学専任講師・京都教区専光寺住職）のご法話の記録です。

先生はご自坊のお寺を守りながら、本山の聖教編纂室主任編纂研究員から大谷大学に戻られ学生の教育の現場へと移られて、生活環境が変わられ大変お忙しいなかでのご出講、又、コロナの急増を鑑みて今回オンラインでのご法話を頂戴致しました。

本書で先生は『「聞思して遅慮することなかれ」という呼びかけに本当に私たちは応答できているのでしょうか。』と問いかけをしてくださいました。そして、『親鸞聖人の生涯はまさに聞思、聞くということに徹底されていた方といっていいと思います。（略）私たちが教えを聞くということは、共感するといいますか、言葉や文字の表面的な理解だけでは無くて、その奥にある願いというか、そういうものまでを受けとめることが大事（略）親鸞聖人をはじめ、無数の念仏者の方々から、どうか教えに出会ってくれと、そして自らが握りしめているこれこそが正義だという価値観、物差しというものを手放すところに開かれる本当の安心世界というものにどうか出会ってくれと願われ、呼びかけられているのです。』とお話し頂きました。

私に何が願われているのか、私は何を願っているのか、先生のお話しを頂きながら問い返しを

することができました。教えを聞くということは常に聞思していくことがとても大切であり、宗祖の学ぶ姿勢であることを教えて頂きました。知的理解ではなく、深い感動が一生涯歩んでいく力となり、遅慮せずこの道を尋ね歩んでいって欲しい願いを聞きながらこれからも聞法していきたいと存じます。

先生にはお忙しい中、原稿に目を通して頂き校正賜りましたこと、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

ご法話のテープを原稿に起こして下さいました、護持会役員の淡海雅子様に感謝申し上げます。

合掌

二〇二二年十月二十九日

第三十二回　報恩講にあたり

光照寺　住職　池　田　孝　三　郎

第三十一回　光照寺報恩講　法話
「聞思して遅慮することなかれ」

本明　義樹先生　講述

2022年（令和４年）10月29日
発　行　真宗大谷派　弘興山　光照寺
事務局　〒331-0821
埼玉県さいたま市北区別所町102－２
電　話　048－651－2781